



2013 ISSUE 1

AMERICAN VIEW

アメリカ大使館発行のマガジン



特集

JAZZ CONNECTION

日本のサッチモが繋いだニューオーリンズと日本の絆

[TOPICS]

- ★ Pursue Your Dreams!
NASA長官が日本の若者に語った「夢を追い続けることの大切さ」 - p.11
- ★ Friendship Blossoms
100年の時を経て、新たに日米を結ぶ友好の木 - p.13
- ★ California Cuisine Specialist
カリフォルニアから始まったフード&ワインスペシャリストへの道 - p.15

JAZZ CONNECTION

“日本のサッチモ”が結ぶ日本とニューオーリンズの絆

東京近郊にある陽気なパブ。金曜日の夜、ここはあらゆる層の人々で溢れかえる。若いカップル、ひとつのテーブルを囲んだ何人もの年配の女性たち、盛り上がっている若い外国人グループ。幼い息子を連れた母親もいる。店の隅にはステージがあり、今まさに始まるうとしているショーを一見しようと、店の外にも人々が列を成している。このように、年齢も性別も、国籍さえ千差万別の人たちを引きつけるなんて、一体どんなショーが始まるのだろうか。舞台上に現れたのは「外山喜雄とデキシーセインツ」。懐かしいニューオーリンズのジャズを奏でるグループだ。彼らの演奏が始まると、その場にいる誰の顔にも笑顔がこぼれる。

「ジャズはアメリカが20世紀に生んだ偉大な芸術、そして世界にくれた素敵なプレゼントなんですよ」。アメリカン・ビュウのインタビュアーで外山さんは誇らしげに、そしてとてもうれしそうに、こう答えてくれた。



ライブでトランペットを吹き、バンドに合わせて歌うとき、彼が考えているのは「ニューオーリンズのスプリットと『サッチモ』（ルイ・アームストロングの愛称）のハートを伝えて、お客さんに喜んでもらいたい」ということだ。6人のメンバーで構成されるデキシーセインツは、「聖者の行進」のような往年の名曲を演奏しながら、お客さんにニューオーリンズ・ジャズについて説明し、手拍子や歌で演奏に参加するよう呼びかける。

外山さんは「日本のサッチモ」と呼ばれている。その理由は、彼が「この素晴らしい世界」(What a Wonderful World)を歌い始めるとすぐにわかった。その重厚な声の響きが、彼の尊敬するジャズの巨星ルイ・アームストロングとそっくりなのだ。

“ジャズはアメリカが世界にくれた素敵なプレゼント”

JAZZ



若いころジャズに魅せられた外山夫妻が、ジャズ生誕の地ニューオーリンズに向かったのは1968年のことだった。それから5年間、ふたりはこの町で暮らしてジャズを学んだ。「アメリカに行つて、すごく視野が広がりました。世界を見る尺度が違ってくるんですね。特にニューオーリンズはジャズのメッカです。だからヨーロッパからも勉強に来ているし、いろいろな人が来ているんですよ。ジャズのコアの人たちと関係ができたりする。日本だけに行たら、日本のことしか見えない。ニューオーリンズからヨーロッパにも行きましたが、いろいろな場所を体験してみると、本当に違うものが見えてくる気がしました」

ニューオーリンズでは地元のミュージシャンと一緒に勉強したり、ジャズの著名人と友達になったりした。こうしたネットワークと外山夫妻のジャズに対する深い愛情により、ふたりはニューオーリンズと日本の間で、音楽を超えて広がり、人々の人生を変える人間同士のつながりを築くことができた。

日本に帰国後、1990年代にニューオーリンズを再訪した外山夫妻は、町がとても危険な場所に変貌していたことにショックを受けた。あちこちにドラッグが溢れ、実際に銃を持っている若者がいると知ったふたりは、何とかしなければと思った。そのとき外山さんの頭に浮かんだのがルイ・アームストロングのことだった。

アームストロングはスラムで生まれ、若いころピストルを空中に発砲したため少年院に送られた。その少年院で音楽を学び、金管楽器のコルネットに熱中したサッチモは、ついにはジャズの世界に革命を起し、史上最も偉大なミュージシャンのひとつりに数えられるようになった。

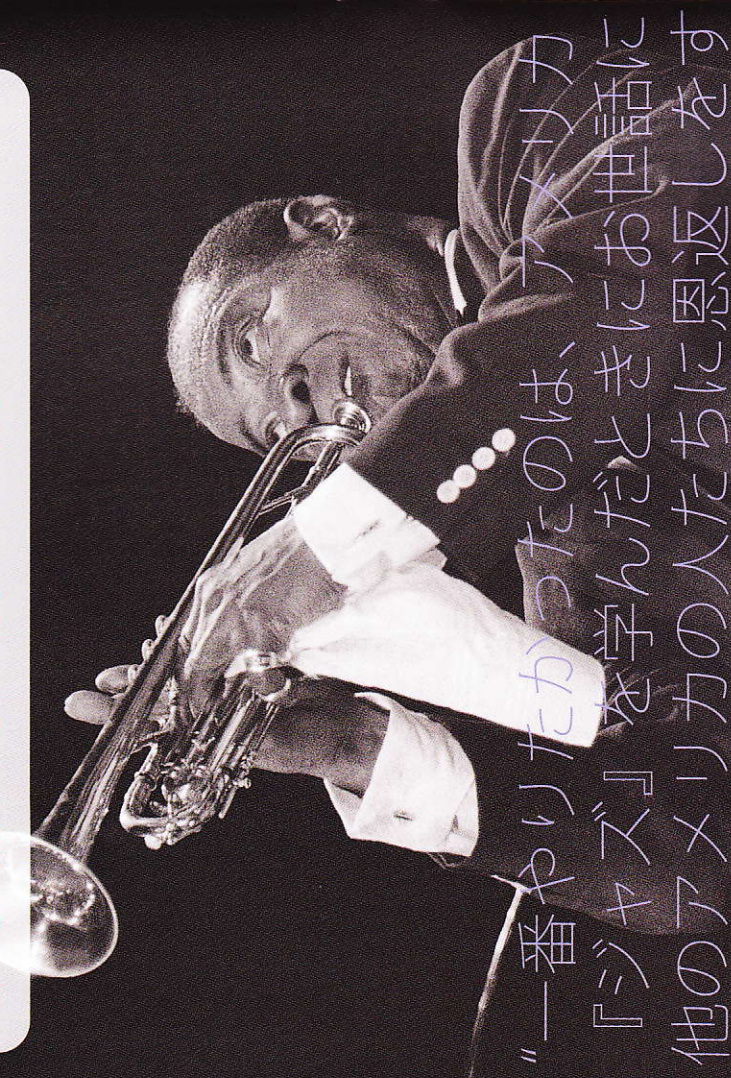
サッチモの人生からヒントを得た外山夫妻は、日本ルイ・アームストロング協会を設立した。この協会は「銃に代えて楽器を」というスローガンの下、ドラッグや暴力に手を染める代わりに音楽を奏でられるよう、ニューオーリンズの子どもたちに楽器を贈ること、そしてサッチモの音楽を楽しむとともにサッチモの精神を多くの人々に知ってもらうことを目的としている。「まず僕たちが一番やりたかったのは、アメリカが世界にくれた偉大なプレゼント『ジャズ』を学んだときにお世話になったアメリカのミュージシャンや他のアメリカの人たちに恩返しをすることでした。皆さん、本当に心が広い、優しい人が多い人です」



2005年にハリケーン・カトリナがニューオーリンズを襲った直後、外山夫妻は日本人たちからの支援を募るメッセージをインターネット上に掲載した。するとジャズのファンやミュージシャンから、ハリケーンで楽器を失ったミュージシャンや子どもどもたちに楽器を贈りたいというメッセージが殺到した。「驚くほど多くの人たちが支援の手を差し伸べてくれました。日本ルイ・アームストロング協会に、合計でなんと1000万円の寄付が届いたんです」。外山夫妻はニューオーリンズの団体やミュージシャンとの人脈を利用して多額の寄付金と楽器を送り、ハリケーンの被害を受けたジャズ発祥の地の復興を支援することができた。

そして2011年3月11日。今度は日本が災害に見舞われた。東日本大震災で被害を受けたのは主に東北地方だったが、外山夫妻が住む東京近郊の町は埋立地の上に作られているため、ふたりの家も大きな被害を受けた。しかし彼らに自分たちの状況を心配している暇はほとんどなかった。震災の直後から、日本を助けたいがどうすればいいかというニューオーリンズの人々からの問い合わせの電話やメールが殺到したからだ。

“一番やりたかったのは、アメリカが世界にくれた偉大なプレゼント『ジャズ』を学んだときにお世話になったアメリカのミュージシャンや他のアメリカの人たちに恩返しをす





過去に日本ルイ・アームストロング協会から楽器を受け取ったことがあるニューオーリンズの学校のうち1校は、日本を支援する募金集めのチャリティイベントを開いた。ニューオーリンズのジャズ・ライブハウスで、子ども向けの音楽プログラムの振興や学校への楽器の寄贈も行っているティピティナス財団も、支援を申し出るメールを送ってきた。「カトリーナで同じような壊滅的被害を受ける経験をした私たちには、被災地に楽器を送る必要があることが理解できました」とティピティナス財団のベサニー・ポールソン事務局長は言う。「カトリーナの後、前に進み、ニューオーリンズの再建を続ける意欲を人々に持たせる光の役割を果たしたのが音楽です。日本の震災の後、ティピティナス財団が日本支援を決めたのは自然なことでした。私たちは、カトリーナの後ニューオーリンズ市民が持ったものと同じ希望と励みを、津波の被災者にも持ってもらうたかったのです」

外山さんは言います。「本当にありがたいことだと思いました。こういうことになるとは思っていませんでした。そのとき被災地はまだ、水もない、食料もない、電気もない、混乱した状態でしたから、楽器どころではないと思いました」。日本ルイ・アームストロング協会がティピティナス財団に力を貸し、津波で楽器を流されているバンドがないか探した結果、宮城県気仙沼市の「スウィング・ドルフィンズ」と同県多賀城市の多賀城東小学校の「ブライト・キッズ」という2つの子どものバンドが被害に遭っていることがわかった。そしてこの2つのバンドに、ティピティナス財団からの寄付金で購入した新しい楽器を送る手配をした。

楽器をもらった若きミュージシャンの中には、家を失って避難所で生活していた子もいたが、真新しい楽器を使って練習を始めた。そして2011年4月24日、震災後まだ2カ月もたたないうちに、スウィング・ドルフィンズは気仙沼市の避難所の前でコンサートを開いた。その模様は日本全国に放送され、当時の数少ない明るいニュースのひとつになった。「悲しみが満ちている状態の中、それがすくなく温かい話題となりました。良いニュースとなったので、とてもうれしかったです」と外山さんは思い起こす。



外山夫妻は長年、ニューオーリンズと日本の若いミュージシャンを対象とするジャズ交流プログラムを企画することを夢見ていた。その夢が一部実現した。2012年10月、日本ルイ・アームストロング協会はティピティナス財団、国際交流基金と協力して、ティピティナス・インターン・バンドとオー・ペリー・ウォーカーズ・チョーズン・ワウンズ・プラスバンド（OPWバンド）の子どもたちもニューオーリンズから日本に招いた。「私たちが支援してきた高校生の子どもたちが、まさか日本に来る機会があるなんて思っていませんでした。私たちが（ニューオーリンズに）行ったときに、将来日本に行けたらいいなという夢みたいな話をしていたんです。その子たちが日本に来られることになって、本当に夢が実現しました。子どもたちにとって本当に素晴らしい新しい経験をしたと思います」と外山さんは語った。来日した子どもたちは「横濱ジャズプロムナード」「東京ニューオーリンズ・ジャズ・フェスティバル」（サッチモ祭）のほか、被災地での数々のイベントで演奏した。

ティピティナス財団のプログラム・マネージャー、エミリー・メナード氏はこのように言っている。「日本訪問のハイライトは、私たちが楽器を贈った日の子どもたちと会い、彼らが大好きな音楽を演奏するのを聴くことでした。実際に会うのは初めてでしたが、どの顔もなじみがあるように見えました。どういうわけか、私たちはつながっており、ずっと昔から彼らのことを知っていたように感じました」

かつてブライト・キッズのメンバーだった多賀城市の中学生、千葉隆吉君は、ニューオーリンズの若いミュージシャンと、彼らの先生でもある有名なジャズサクソ奏者のドナルド・ハリソン氏の演奏を見る機会を得て大喜びだった。お母さんの貴久江さんは「隆吉にとって夢のような時間でした。外山さんがいなければ、ドナルド・ハリソンが日本に来ることもなければ、東北学院（隆吉君が通う中学校）に来て息子の真横で演奏してくれることもありませんでした」と語った。



ニューオーリンズから来た若いミュージシャンたちも、日本訪問から深い影響を受けた。東北の被災地を訪れることは、それ自体が感情を揺さぶられる体験だが、特に幼いころハリケーン・カトリーナを経験した彼らが被災地で演奏するのは感動的だった。「たとえ言葉で思いを伝えられなくても、私たちが交流しているのは、災害からの復興がどのようなものか、そして音楽にどれほどの力があるかを理解している人たちだということが、私たちにはわかりました」とティピティナスのポールソン事務局長は言う。「この経験から子どもたちが得た人生の教訓と交流には、計り知れない価値があります」

気仙沼市では、津波で陸に押し上げられた漁船が、津波の破壊力を物語る記念碑として道路沿いに残されている場所も訪れた。「ニューオーリンズのジャズのお葬式のときに演奏される賛美歌をみんなで演奏しました。それも彼らにとって思い出深いことだと思います」と外山さんは語った。OPWバンドの一員として日本に来た高校生デビン・リー君は、日本で大地震が起きたと聞いてどう思ったかという質問に、このように答えた。「すぐにハリケーン・カトリーナのことを思い出しました。船やがれきがあちこちにあって…。カトリーナのときのことをいろいろ思い出してしまうので、被災地のニュースを見るのがつらいときもありました」

共に大災害を経験した日本とニューオーリンズは、特別な絆を育んできました。日本を訪れたニューオーリンズの子どもたちは、おそらく皆が、ティピティナス・インター・バンドのハンター・バーガミー君の説得力のある言葉に同意するだろう。「日本での経験を通じて、僕は文化に対する尊敬の念を学びました。宮城でいろいろ経験して、世界がひとつになって協力し、助け合わなければならぬことがわかりました。そして同じような自然災害にしばしば見舞われるニューオーリンズと日本は、再建と再生を理解しているという点で固く結ばれています」

ポールソン事務局長は、日米の子どもたちが夕食を共にした仙台でのイベントを思い起こす。「それまでは片言の英語や身振り手振りでコミュニケーションを取っていたんですが、しばらくすると誰かがマイケル・ジャクソンの歌を歌い始めたんです。ここでも、言葉で意思の疎通ができないときに、子どもたちを交流させたのは音楽でした」

「今回の文化交流はとりわけ特別なものでした。なぜなら、それまで一度も会ったことがなく、話す言葉さえ違うのに、共通の体験があったので、私たちは言葉の壁を乗り越えて一体になることができました」とメナード氏は説明した。

ニューオーリンズからの一行にとって、今回の旅で最も充実感を味わったのは、日本の観客が自分たちの音楽と一体になっていると感じられたときだった。日本の観客は概してアメリカ人よりも遠慮がちだが、ティピティナス・インター・バンドのダリル・ステイブス君は「僕たちの演奏で日本の観客はとて盛りに上がりました。どのショーでも大勢の人が参加してくれたので、演奏をさらに楽しむことができました」と語った。OPWバンドのデビン・リー君は「お客さんたちの表情を見ると、みんなとても楽しんでくれていることがわかりました。ニューオーリンズの人たちと同じように、僕たちと一緒に踊ったり、セカンド・ラインに参加してくれました」と言う。

“言葉で意思の疎通ができないうちに子どもたちを交流させたのは音楽”

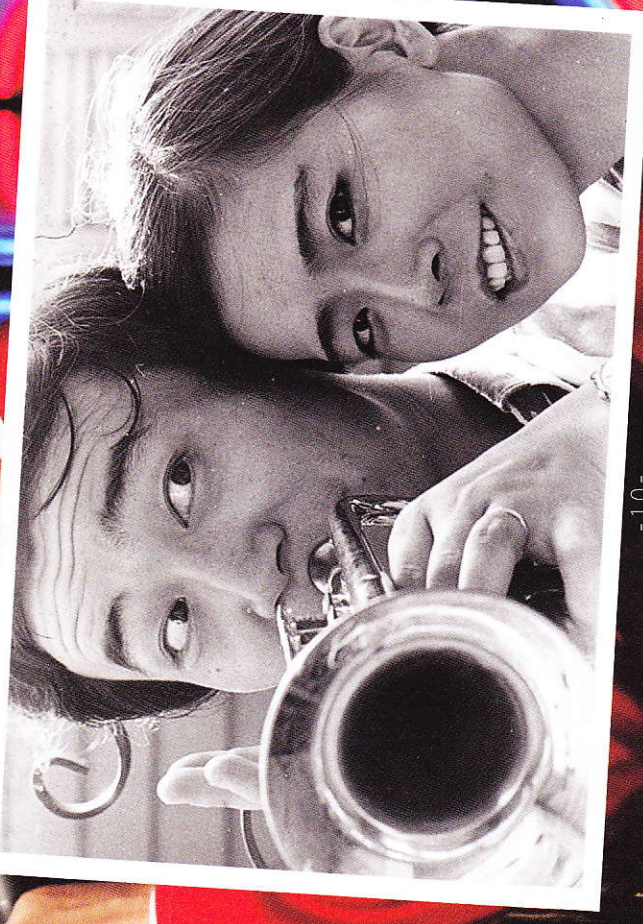
“音楽は『世界共通の言葉』”

今回のジャズ交流プログラムへの参加を通じ、日米どちらの子どもたちも、音楽を通じて、言葉と文化を超越する、人と人との間の深い結び付きが生まれることを学んだ。悲劇を経験した人を元気づける一方で、同じ感情を分かち合うために人々を結び付ける力が音楽にはある。千葉隆喜君のお母さんは、隆喜君がこのプログラムでこうした交流を体験できたことを喜んでいて。

「音楽は英語関係ないんですよ。音、リズム、メロディーは世界共通なので、（英語を）話すことができなくてもわかりますよね。悲しい曲でもうれしい曲でも、聴くだけで悲しい曲なのかうれしい曲なのかわかる。それを外山さんに教わりました。音楽は『世界共通の言葉』なんです」

今回の「ジャパン・ツアー」に関わった誰も、忘れられない経験だったと言う。そして外山喜雄さん、恵子さんにとっては、長年の夢がかなったことになる。ふたりはこのプログラムを通じて、若いころに見つけた「ジャズという贈り物」を使い、大きな災害を経験した若者の心を慰めた。けれどもジャズ交流プログラムは始まったばかりだ。「この夏には、ニューオーリンズからの楽器で復活したスウィング・ドルフィンズをニューオーリンズへ連れて行って、あちらで『ニューオーリンズの皆さん、ありがとうございませう』というお礼の気持ちを含めた演奏をさせてあげたいと思います」と外山さんは言う。ティピティナス財団によると、スウィング・ドルフィンズは2013年8月にニューオーリンズを訪問する予定であり、現地の中学生バンドとのセッションや、ティピティナスのライブハウス、サッチモ・サマー・フェスティバルでの演奏のほか、日本へのツアーに参加した子どもたちとも交流する。

一方で外山さんは、ライブ演奏と、ルイ・アームストロングについての本の執筆を通じて、ニューオーリンズの素晴らしい世界を日本に紹介する活動のジャズを教える取り組みを続ける。世界中の若者たちを結び付け、互いに交流し、ジャズや人生について学びあえるようにならなければならない、というのが、外山喜雄さん、恵子さんの草の根の活動の根の活動であること、今後も変わらないうらう。



「やると決めたら世界も変えられます」。東京工業大学附属科学技術高等学校の生徒約150人を前にした講演で、チャールズ・ボールドン米国防航空宇宙局(NASA)長官はこう述べた。2012年12月に東京を訪れた際、ボールドン長官は若者と熱心に交流し、「よく学び、一生懸命努力し、失敗を恐れてはいけません」と話し、積極的に夢を追いかけてよと彼らにエールを送った。

東工大附属高校での講演で、ボールドン長官はさまざまなNASAのプロジェクトを取り上げ、自らも参加した4回のスペースシャトルのミッションについて詳しく説明した。講演中も生徒たちに質問するなど、彼らが長官の講演を聞いているだけでなく、積極的に対話に参加した気持ちになれるように心がけた。話が終わると、長官は「ばかげた質問」などひとつもないと言って、生徒たちに遠慮なく発言するよう促した。そして最後には、「大きな夢を持って、自分のやりたいことをやろう」という言葉を贈った。

講演に先立ち、ボールドン長官は生徒たちの科学プロジェクトの展示を見ながら、生徒たちと直接交流した。長官は生徒たちの説明に熱心に耳を傾け、研究について質問したり、研究の続け方についてアドバイスをした。

東工大附属高校訪問以外にも、ボールドン長官は「FacebookでNASA長官に質問しよう!」というイベントを通じて、日本の人々と意見交換した。Facebookには、小学生から専門家までさまざまな人から100件を超える質問が寄せられ、その中から選ばれた7つの質問にボールドン長官が自ら答えた。長官の回答はYouTubeで日本語字幕付きで見ることができる。
www.youtube.com/user/usembassytokyo/videos?view=1

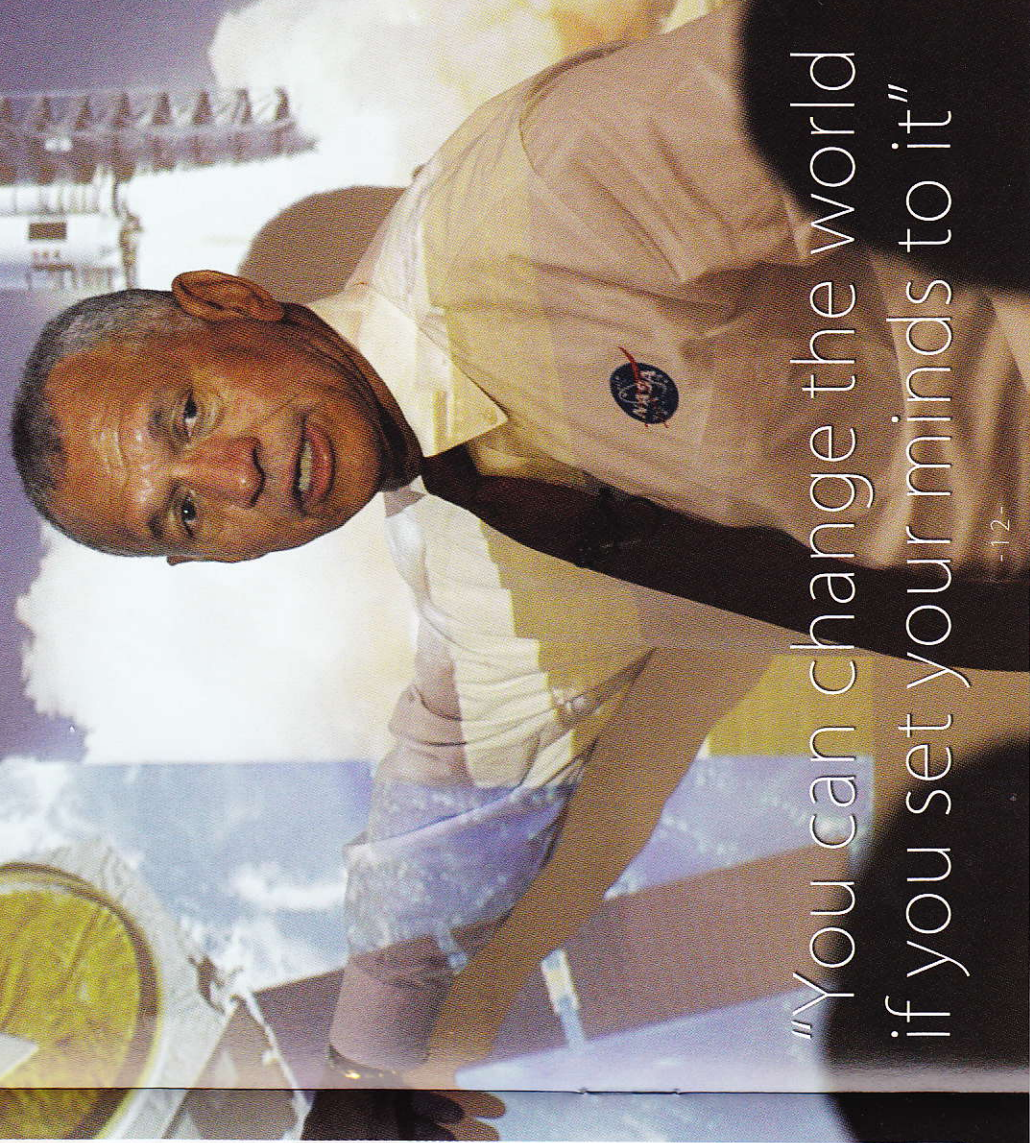
ボールドン長官が回答したなかには、子供達からのとても興味深い質問もあった。宇宙飛行士になりたいという夢をかなえるために、何をすればいいかという小学生からの質問には、「宇宙飛行士を目指すのはひとまず置いて、学校での成績をあげることに全力を尽くしましょう」と、大変現実的なアドバイスをした。

日本の宇宙開発に関する質問もあった。ボールドン長官は回答の中で、宇宙ステーション補給機「コウノトリ」や実験棟「きぼう」を開発した日本と国際宇宙航空研究開発機構(JAXA)を称賛した。コウノトリはこれまで3回、国際宇宙ステーション (ISS) に物資を輸送している。また「きぼう」は、ISSにいる宇宙飛行士が、実験装置を宇宙空間に出したり、棟内に取り込むことができるロボットアームを備えた最先端のカプセルである。長官は「日本には他のどの国も製造できない必要なものを作る能力があります」と評した。

短い東京滞在中、ボールドン長官はあらゆる機会をとらえて、夢を追いかけること、そして自分にとって大切なことを決めるべきに決まらぬことを日本の若者に呼びかけた。そして「チャンスをつかみ、危険を冒す意思があれば、どんな逆境にも打ち勝てます。しかしそれには万全の準備が必要です。本心に、本心に、本心に一生懸命勉強しなければなりません。何度が失敗しても構いません。やり続けることです。懸命に努力して、失敗したからといって決してあきらめないでください」と励ました。

Pursue Your Dreams!

NASA長官が日本の若者に語った 夢を追い続けることの大切さ



"You can change the world if you set your minds to it"

Friendship Blossoms

100年の時を経て、新たに日米を結ぶ友好の木

1912年、当時の東京市は日本とアメリカの友好の印として、3000本のサクラをアメリカに贈りました。毎年春になると薄いピンク色の花を咲かせるこの3000本のサクラは、それから長い年月を経て、アメリカの首都ワシントン・シンボル、そして日米の深い絆を思い起こさせる目に見える象徴となりました。

日本からのサクラ寄贈から100周年を迎えるのを記念し、米政府と日米交流財団が共同で設立した官民パートナーシップ「友好の木—ハナミズキ・イニシアチブ」は、米国民からの返礼として3000本のハナミズキを日本に贈ることを決定し、2012年11月16日、そのうち最初の100本を東京都立代々木公園に植樹しました。残りは両国の友好を示す変わらぬシンボルとして、今後3年間かけ、都内のほか、東日本大震災の被災地である東北地方をはじめとする日本各地に植樹する予定です。

「友好の木イニシアチブ」は、日米の国民同士の異文化・教育交流を体現しています。クリントン前国務長官は、日米のサクラとハナミズキの交換の歴史について次のように述べています。「アメリカに贈られたサクラと同様、このハナミズキの木が日本において、日米間の強固な関係と友好の象徴となることを願います」

ハナミズキはアメリカ南部では、その花の美しさと木陰の涼しさで知られています。花はノースカロライナの州花であり、緑が赤みを帯びた4枚の白い花びらがあります。秋には葉の色が真っ赤あるいは赤みがかった紫に変わり、小さな赤い実が房状になります。この実は人間にとってはあまりおいしいものではないかもしれませんが、鳥の大好物です。昔から、樹皮には解熱剤としての効能があると考えられています。ハナミズキの木の部分はとても堅く丈夫なため、各種用具の取っ手やゴルフクラブなどに使われています。

アメリカからはスイートウォーターレッドやパラチアスノウなど、数種類のハナミズキが贈られ、白だけでなく赤い花を咲かせるものもあります。まだ苗木なので花が咲くまでには数年かかりますが、代々木公園の近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。生きた国際親善のシンボルをご覧ください。

「友好の木イニシアチブ」の詳細は、日米交流財団のウェブサイトをご覧ください。
www.bridgingfoundation.org/friendship-blossom-project

California Cuisine Specialist

カリフォルニアから始まったフード&ワインスペシヤリストへの道



小校給麻：在日米国大使館農産物貿易事務所の専任シェフ

Q. 子どもの頃のことや、どのような教育を受けたかを聞かせてください。

小校：父の転勤が多く、実は私はインで生まれました。4歳の時にアメリカに引っ越し、それ以来、高校まで普通のアメリカの学校に通っていました。その後、大学入学のために日本に帰国。大学3年の時に交換留学生としてボストン・カレッジに行きました。日本で就職しましたが、料理についてもっと学びたかったので、子どもの頃から行きかけたカリナリー・インスティテュート・オブ・アメリカ (CIA) を選びました。

Q. 料理学校は大学の学位取得プログラムですか。それとも1年だけのプログラムですか。

小校：両方のプログラムがあります。CIAには、大学の学位と料理学の修了証明書と同時に取得できるプログラムがあります。日本には、大学の学位と料理学の修了証明書を両方取得できる学校はないと思います。アメリカにはそのようなプログラムが多数あり、それが大変有利な点です。アメリカではあらゆる種類の料理が提供されており、世界中のさまざまな人々と一緒に学べるので、アメリカは料理を学ぶには絶好の場所だと思います。

Q. 料理に興味を持ったきっかけを教えてください。

小校：おそらく私の家族環境によるものだと思います。私の家ではほぼ毎週末お客さまを迎え、母や姉と一緒に料理したものです。私は人をもてなすことが大好きだったので、これを仕事にできたら最高だと思います。ボストン・カレッジには交換留学生がたくさんいますが、その多くは英語があまり話せませんでした。週末にはパーティーや集まりがあったので、それぞれ自国の料理を作ったものです。そうしてみんな友達になるのです。私は、料理が言葉の通じない人同士のコミュニケーション手段になるのではないかと思いました。それで私の仕事はビジネスやマーケティングではなく、世界中で通用するコミュニケーション手段として料理を利用することだと考えたわけです。

Q. ヨーロッパや日本には人気のある料理学校がたくさんあります。なぜアメリカの料理学校を選んだのですか。

小校：日本で料理を勉強するとおそらく4~5年かかると考えました。一方、アメリカには1年間の短期プログラムがあり、内容もきめ細かでした。それでアメリカを選んだのだと思います。またアメリカの学校には、世界中からたくさんの人々が集まります。日本の料理学校に行っていたら、接するのは日本人だけだったでしょう。私が行った学校は国際色豊かで、イタリア人などヨーロッパの人たちや、アジアの人々も大勢いました。

Q. CIAはカリフォルニア北部のナパバレーにある料理学校ですね。第一印象を聞かせてください。

小校：とても穏やかで景色が大変美しいところだと思いました。CIAに行く前、私は単に料理を学ぶつもりでしたが、最終的には食とワインの組み合わせについてもっと学びたいと思うようになりました。どこに行ってもワインがあるナパにいたからでしょう。簡単なディナーの席であっても、必ずワインが添えられていました。ですからワインと食の組み合わせ方を学ぶ絶好の機会になりました。私はワインの作り手や、ごく普通の日常的な状況で、ワインと食を組み合わせるシエフから学ぶことができました。

Q. CIAでの勉強を終え、日本に帰国して、今の仕事を選んだ経緯を教えてください。

小校：CIA在籍中はアメリカ料理を専門にするつもりはなかったのですが、ここ10年、特に私がアメリカを離れていた2年間に、アメリカ料理の質が高まっていくことに大変驚きました。農産物の質が驚くほど高くなっていましたし、アメリカ料理は進化していました。アメリカに15年以上住んでいました。アメリカ料理がこれほどおいしいとは知りませんでした。それで、今のアメリカの農産物や料理がいかにおいしいかを日本人々に伝えたいと思ったのです。日本帰国後に食とワインに精通したカリフォルニア料理の専門家になることにしたのは、そのような理由からです。日本にいるときにはほとんど日本食を食べ、そばやお寿司が大好きでした。でもカリフォルニアでは、なぜか日本食が恋しくなることは全くありませんでした。それはおそらく、カリフォルニア産のヘルシーな野菜などの質の良い農産物をいつも食べていたからだだと思います。

“アメリカ力は料理を学ぶには絶好の場所”

Q. アメリカ大使館の農産物貿易事務所と大使公邸でのお仕事について聞かせてください。

小枝: 大使公邸では何回かイベントを催しました。公邸付のシェフと一緒にアメリカ料理のメニューを紹介しました。東日本大震災の津波の被害者を支援するチャリティー活動もしました。スージー(ジョン・ルース駐日米国大使夫人)の発案で、日本とアメリカの食材を使ったイベントを行い、両国の食材を使ったレシピ本を作りました。収益は全て被災地のひとつ女川町の支援に使われます。日本にいながら何もできなかったのですが、このプロジェクトに参加でき、とてもうれしく感じました。自分でも何かしたいと思ってたのですが、何をすれば良いのかわかりません。ですから、私にとっては、人を助けるために自分にできることをする、とても良い機会でした。私たちは「トモダチ」なのだから、レシピ本では日本とアメリカの食材を使うべき、というのはスージーの考えでした。私たちは日本米の食材を使ったレシピ本を作り、アメリカ独立記念日のパーティーやその他のイベントで紹介しました。

Q. アメリカの食材の話が出ましたが、日本で購入できて毎日の料理に使えるもので、お勧めのアメリカ食材はありますか。

小枝: 私は毎日の料理にレモンを使います。カリフォルニア料理はレモンを多く使うと思います。レモンの酸っぱさが好きですが、フルーティーなところも好きです。家ではレモンが欠かせません。日本では濃縮ジュースに慣れています。生のレモンを使うと風味や香りが増すので、日々の料理にレモンを使うことをお勧めします。米酢の代わりにレモンを使ってもいいです。私は少量のレモンをお浸しに使ったり、時にはカルパッチョのように刺身に使うこともあります。

カリフォルニア・オーブ・オイルのパンサラダとアラスカ産天然タラ、トマトとセロリ



小枝シェフのレシピはウェブサイトに掲載されています

Q. 留学を考えている日本の若者へのメッセージや助言はありますか。

小枝: 海外に行くのが不安な人は怖いと思うかもしれませんが、最初の一步を踏み出せば、ひとつの国にしか住んでいない人よりも、視野を広げることができると思います。若い時にはさまざまな文化的背景を持つ人々と一緒に過ごし、いろいろなることに触れるべきです。そうすれば将来、そうした多様な人々と働き、協力する時の準備になりますから。できるなら、日本と外国の2つの国で学ぶといいと思います。

(AP Photo/Eric Risberg)



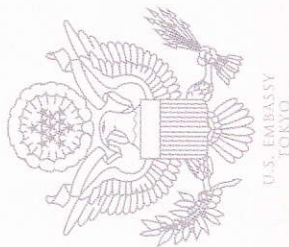
American Viewはアメリカの文化や社会を紹介するとともに、日米間のさまざまなテーマや出来事について考える、在日米国大使館発行のマガジンです。記事の全文、イベントなどのビデオや写真、その他の情報は、ウェブサイトをご覧ください。http://amview.jp/amview.usembassy.gov

編集部では、アメリカや日米関係に関する読者のストーリーを募集しています。アメリカにまつわる、あなたの経験を皆さんとシェアしてみませんか。ウェブサイトのSUBMITページからご投稿ください。

本誌記載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。

在日米国大使館 広報・文化交流部
American View編集部

読者の皆様へ



編集・発行

在日米国大使館 広報・文化交流部

〒107-8420 東京都港区赤坂1-10-5

American View: amview.japan.usembassy.gov

在日米国大使館: japanese.japan.usembassy.gov

Connect USA - イベント・アメリカ留学情報: connectusa.jp